

趣味の話

～聖地巡礼(後)～『千と千尋の神隠し』

弁理士 中川 裕幸

今回の聖地巡礼の話は、宮崎駿監督の名作『千と千尋の神隠し』です。私にとって、第1回のお題『エヴァンゲリオン』を金剛界曼荼羅としたら、この作品は胎蔵界曼荼羅である、という感じの作品で(←「ちょっと何言ってるかよくわからない」と思いますが(笑))、人生のそれぞれの段階で見直すと、新しい発見があると感じる作品です。



カオナシの立体パズルー

(1)序：映画『千と千尋の神隠し』のこと

他人から趣味は何ですかと聞かれると「鉄道」ですと答えた方が、話が続くのでついそう言うってしまうのですが(笑)、より深入りしている趣味は「模型」です。宮崎駿監督は、『モデルグラフィックス』(通称MG)という模型雑誌に長年、連載を持っていたことがあり(『紅の豚』はこの連載から生まれています)、私にとって宮崎監督はアニメの巨匠というより、飛行機や戦車を通じてその時代の雰囲気や解説してくれる近代史の先生でした。このように別の入射角ではありますが、勝手に親近感を持っているが故に、宮崎作品はデフォルトで見に行くこととなっています。

その中であって、やはり『千と千尋の神隠し』(2001年)は特別な作品で、阪神・淡路大震災(1995年)の雰囲気や引張った時代にあって、いろいろなことを考えさせる作品でした。劇場に3回見に行った覚えがあります。「カオナシ」をみて、模型やミリタリー知識に飢えて咀嚼もままならなかった自分を顧みて苦笑しましたし、作品に登場する海原鉄道に心地よさを感じて、あらためて自分の鉄分の多さを認識したりしていました。トミカから海原鉄道のミニカーが発売されたときには、仕事帰りに、東京駅のヤエチカにあるトミカのお店にダッシュで買いに行きました(←未だ「カオナシ」を卒業できず(苦笑))。



海原鉄道のトミカー

(2)「舞台はどこか」の第一候補「四方津」(山梨県)

千尋一家が引っ越す予定だった丘の上のニュータウンのモデルがあるのか?あるとすればそれはどこか?というのは、長年ぼんやりと抱えていた疑問でした。崖の上にある街並みとして思い当たったのは、東北/北陸新幹線に乗るときに左側に見える田端の崖とか、横浜の82号線の上に見える根岸の崖でした。しかしながら、両街並みとも街中で、神様たちが集う山深い雰囲気とは違う気がします。ちなみに、前者は新海誠監督が『天気の子』(2019年)で、また、後者は細田守監督が『未来のミライ』(2018年)でそれぞれを舞台としており、『千と千尋の神隠し』でなくとも崖の上の街並みは、ドラマが展開しそうなワクワク感がありますね(我々の世代には『空飛ぶ幽霊船』の崖の上の洋館が起点ですね)。

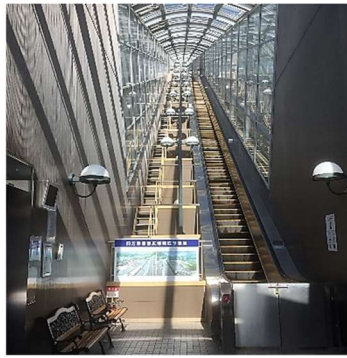
さて、ネットで検索すると、「作品のニュータウンは山梨県の四方津である説」が大きな説得力を持って語られています。ナルホド、と思って、一昨年(2023年)の秋にJR中央線で行って来ました。中央線快速の終点、高尾駅で乗り換えて東京駅から1時間半程度かかります。

Wikiで調べると、このニュータウン「コモアしおつ」は大手デベロッパーの積水ハウスが山頂を切り崩して造成し、1991年から分譲地を売り出したそうです。もう、30年以上前にできたニュータウンということになります。JR四方津駅と山頂の街との間はコモアブリッジという長大な斜行エレベーター&エスカレーターで結ばれていますが、終点付近に駐在所もあって高セキュリティです。それまで知らないで、この前を特急あずさで何度も通

過していたわけですが、ダムか何かの水利施設だとずっと思っていました。実際に、斜行エレベーターを使って登り、街並みを見学させてもらいましたが、おしゃれな家が綺麗に並ぶ、天空のニュータウンでした。ちょっとハイソな千尋のお母さんが、前の住まいより田舎だったろうこの場所への引っ越しに同意したことについて、とても納得できました。

なお、JR中央線と、これに並走する国道20号線(甲州街道)は、下流で相模川となる桂川に並行しており、その先には宮崎監督がご自身のエッセイで書いていた山荘がある小淵沢があり、さらに先には不思議な神様の世界が漂う諏訪湖地域があります。四方津説は正しいように感じました。

↓ 駅のホームとコモアブリッジ



下り 甲府・小淵沢方面 for Kofu and Koyuzawa		上り 高尾・新宿方面 for Takao and Shinjuku	
平日 Weekdays	土・休日 Saturdays, Sundays & holidays	平日 Weekdays	土・休日 Saturdays, Sundays & holidays
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
0	0	0	0
1	1	1	1

駅の時刻表 ↑

(朝は東京駅への直通があります)

(3) 「舞台はどこか」の第二候補「箱根・強羅／仁ノ平」(神奈川県)

とはいえ、個人的には、この四方津を補完するもう一つの候補地があります。「急な坂道」+「海原鉄道」のキーワードから、どうしても箱根・強羅／仁ノ平を思い浮かべてしまうのです。このエリアは昔から縁のある場所なので、余計にそう思うのかもしれませんが。

まず、「急な坂道」ですが、箱根の仙石原から宮ノ下に向かう178号線の途中に、強羅方面に分岐して登る急な坂があります。この坂は、ローギヤに入れてアクセルを踏む必要があるような急な坂です。子供の頃、父親の運転でこの道を上りましたが、道祖神こそなかったものの、昔は途中にすれ違い用のスペースが設けられているような細い道だったような記憶があります。また、千尋一家の車は途中、左側に分岐する道に入って不思議な世界に迷い込むわけですが、この坂を上る途中にも左に分岐する道があります(ちゃんと彫刻の森美術館駅脇の踏切に出ますので、安心して通ってください(笑))。

次に、「海原鉄道」です。作品中、この鉄道は坂上の神様の世界の中に走っていたのですから、この点、四方津のニュータウンの坂下を走るJR中央線とは違います。その点、箱根登山鉄道は、先の急な坂を上ったところを走っています。箱根登山鉄道が好きなので、どうしても前のめりになってしまうのですが、この位置関係は海原鉄道と同じです。さらに、作品中で、千尋(千)は奉公する油屋の女中部屋から眼下を走る海原電車を見るわけですが、箱根登山鉄道の北側(仁ノ平)の丘には、かつて小涌園などの巨大旅館の従業員アパートが建っていたわけで、まさにこの位置関係です。

ということで、単なるこじつけかもしれませんが、油屋を思い出しながら温泉に浸かるのも楽しいので、「舞台は箱根・強羅／仁ノ平である説」も信じてみてください(笑)。



↑ 強羅駅－彫刻の森駅(旧仁ノ平駅)の風景



↑ 旧型車両(モハ1型)



↑ 箱根鉄道の
プルバックおもちゃ

(4) 自動車による検証旅

2024年の初夏にこの執筆のオファーを貰ったこともあり、もう一度、自動車旅で上記仮説を検証してみよう、という気になりました。四方津と箱根に加え、途中、8月しかオープンしないという河口湖自動車博物館の訪問も目的とするため、調整して早速8月下旬に決行しました。鍵は、作品のオープニング中に描かれる道路標識です。ストリートビューで予習の上、車中から写真を撮るため、運転好きの息子に運転してもらい、私は写真の撮影に専念しました。

Googleマップ使用



『千と千尋の神隠し』

オープニング(⊙スタジオジブリ)↑

四方津を目指す

中央高速を使って上野原インターで降りて20号線を進み、四方津。そして、大月インターで高速に乗って、東富士五湖道路(E68)で南下し、河口湖自動車博物館を見学。そして、さらに同自動車道で南下して箱根へ、というものでした。朝7時には自宅を出たのに、首都高と中央高速の渋滞は相変わらずで別な意味で苦労した旅でした。ただ、逆に渋滞のおかげで、『すずめの戸締り』(新海誠監督)で描かれた北の丸トンネルをじっくり観察できましたし、また、高井戸あたりではクレージー・ゴン(『ウルトラセブン』38話)が飛来したのは、ここらへんの中央高速がモデルだったのかもなどと思いを巡らせました。渋滞もまた楽しいです。もっとも、のおかげで上野原インターを降りたのは11時を回ってました。

四方津の交差点

甲州街道(20号線)を行ったわけですが、下写真のとおり「コモアしおつ」への分岐を示す交通標識を見つかることができました。「21号線」ならぬ「20号線」から「コモアしおつ」に分岐する道路標示がありました。上記作品中の右へ分岐する矢印の形状が異なります。また、作品と異なり、この交差点においても崖上に並ぶ街並みを見ることはできませんでした。なお、右折して坂を少し登ってみました。下記にレポートする箱根の坂ほど急な坂ではありませんでした。



河口湖自動車博物館

この博物館は飛行機をレストア・展示する飛行機館も併設しており、この数年、ずっと訪ねてみたい博物館でした。…が、いつも「ああ、また8月が終わってしまった…」と嘆くことが続いていたため、「今年こそは！」との意気込みで訪ねました。

実際に足を運んでみると、コレクションの状態の良さだけでなく、展示も素晴らしく、

来てよかったとつくづく思った次第です。この博物館には、シトロエン2CV(ドゥシボー／「2馬力」の意味・かつて存在した宮崎駿監督のプライベートオフィス名「二馬力」の由来ともなった)も展示されています。また、隣接する飛行機館にはレストアされた零戦(『風立ちぬ』の主人公・堀越二郎の設計)や一式陸上攻撃機(胴体のみ。同作品で堀越二郎の同僚として登場した本庄季郎の設計)が展示されていて、今回の聖地巡礼にマッチした目的地でもありました。



↑シトロエン2CV



↑零戦21型



↑一式陸上攻撃機(胴体)

箱根・強羅／仁ノ平

さて、件の箱根・強羅／仁ノ平下の分岐に、仙石原方面からアプローチしました。宮ノ下に至る前に、左に大きく曲がる道の途中で大きな角度で曲がる右折できる坂が見えてきます。上の強羅の街並みは見えないわけですが、分岐を示した道路標示に注目すると、どうでしょう、その矢印は作品のものととてもよく似ている気がします。もしかしたら、宮崎監督の中に、箱根の風景があったのかも？と思うと勝手に嬉しくなりました。なお、坂は相変わらずの急角度で、背中をぐっと後ろに押さえつけられる感覚で登りますが、直前に零戦を見たせいか、戦闘機に乗って上昇するのはこんな感じかなあと思うと、なかなか快感でした。



↑100均の山田化学(株)のトラス構造で作ってみた模型(1/43)

(5)余談：「笹一」

上述のように、『千と千尋の神隠し』のモデルの一つは、国道20号線沿いの四方津であることは間違いないと思うのですが、それでは、油屋で神様方に出されるお酒は何だったんだろう、と酒飲みとしては考えてしまうわけです(笑)。

実は、今回、前を通ったのですが、20号線を四方津から、さらに甲府方面に進んだところに笹一酒造という蔵元があり、個人的にはその日本酒は「笹一」(ささいち)ではないか、と勝手に想像しています。しっかりした日本酒ですが決して重すぎず、食中酒として飲むのに適しているお酒です。釜爺が湯呑み茶碗に注いで、晩酌していたかもと想像するのも楽しいです。東京駅近くに山梨県のアンテナショップがあってここで買えるのですが、ワインセラーのような内装で、私のようなワイン音痴の者だとビビってしまうのですが、ちゃんと日本酒も奥に置いてますので、日本酒ファンも勇気を出して入ってみましょう。

